学位論文要旨

青年期における未来の家庭展望とライフキャリアの形成

広島大学大学院人間社会科学研究科

教育科学専攻　教師教育デザイン学プログラム

人間生活教育学領域

D213722　　渡辺　朗生

論　文　目　次

序章　研究の背景と目的
　第１節　ライフキャリアと生涯発達
　第２節　青年のライフキャリアと時間的展望
　第３節　青年の未来の家庭展望をとらえる研究方法の検討
　第４節　研究の目的と論文構成

第１章　未来の家庭展望の実態と測定方法
　第１節　未来の家庭展望尺度の開発にむけた予備的検討（調査１）
　第２節　未来の家庭展望尺度の開発（調査２）
　第３節　未来の家庭展望の実態と類型（調査３）

第２章　未来の家庭展望と関連する要因の検討
　第１節　家族観及び生活観と未来の家庭展望との関連（調査４）
　第２節　これまでの生活環境と未来の家庭展望との関連（調査５）

第３章　ライフキャリア教育の効果検証―未来の家庭展望の変化に着目して―
　第１節　大学におけるライフキャリア教育の効果検証
　　―未来の家庭展望得点の比較をとおして―（調査６）
　第２節　大学におけるライフキャリア教育の効果検証
　　―未来の家庭展望に関わる記述分析をとおして―（調査７）

終章　総合論議

引用文献

謝辞

資料

序章　研究の背景と目的

第１節　ライフキャリアと生涯発達

キャリアにおける境界がなくなってきた現代（Arthur，2014）においては，例えば副業や転職，学び直しを何度も行うことで様々な職業を経験することができるようなワークキャリアの変化や，家庭生活やボランティアなどの社会的活動によるキャリアを視野に入れた，いわば複線型のキャリアプランを構築することが求められる．特に，大学生の時期にキャリアを模索することをとおして，それに続く成人期，ひいては生涯にわたって，職業や家庭生活，市民活動などのあらゆる生活領域において多様な選択肢をもつとともに，それらを主体的に選択することをとおして自分らしい生き方を実現するにつながると考えられる．「人生 100 年時代」（Gratton & Scott，2016）を生きていく若者においては，キャリアを人生や生き方，ひいては人生上の役割全般を含む包括的な概念としてとらえる必要があるだろう．キャリアに対するこのような考え方は Miller-Tiedeman & Tiedeman（1990）によって，「ライフキャリア」という概念として提唱され，これ以降，その概念やとらえ方に関する理論的な枠組みがさまざまな研究者によって提唱されている．例えば Super（1990）は，個人の思想・信条・心理特性と社会環境とのかかわりの相互作用をとおして，自己のキャリア形成が促されることを示すライフキャリアの「アーチ・モデル」を構築した（図１）．また，近年ではライフキャリアの概念や枠組みの提唱と並行して，ライフキャリアの形成を目的としたライフキャリア教育の提案が試みられている．例えば河﨑（2011）は，小学生から大学生までを対象として，ライフキャリア教育で育成すべき六つの能力領域を措定したカリキュラムモデルを提示している．今後，実証研究の成果にもとづいたライフキャリア教育の効果の検証や，カリキュラムの体系化を目指した研究の進展が期待される．

第２節　青年のライフキャリアと時間的展望

社会全体においてめまぐるしい変化が起こっている現代においては，どのように未来への見通しをもてばよいのかわからない青年も少なくない．青年が自己の未来に対する指標を持ち，豊かなライフキャリアを形成するための方略の一つとして，時間的展望を獲得し発達させることが有効と思われる（小西，2019）．時間的展望とは，Lewin（1959）によって「ある与えられた時に存在する個人の心理学的未来及び心理学的過去の見解の総体」と定義されている．また，近年では，石井（2015）や和田（2019）など，時間的展望を，時間の広がりや内容などの認知的な側面と，時間に対する態度や感情などから影響を受ける感情的な側面の二つの側面からとらえる研究がみられる．次に，時間的展望への影響要因について，例えば Kooji et al.（2018）が未来に関する時間的展望との関連要因について，これまでに行われてきた先行研究の成果をふまえたメタ分析を行った結果，未来展望と個人の勤勉性やポジティブ感情，自己効力感などの個人特性との間に強い関連がみられることを示して

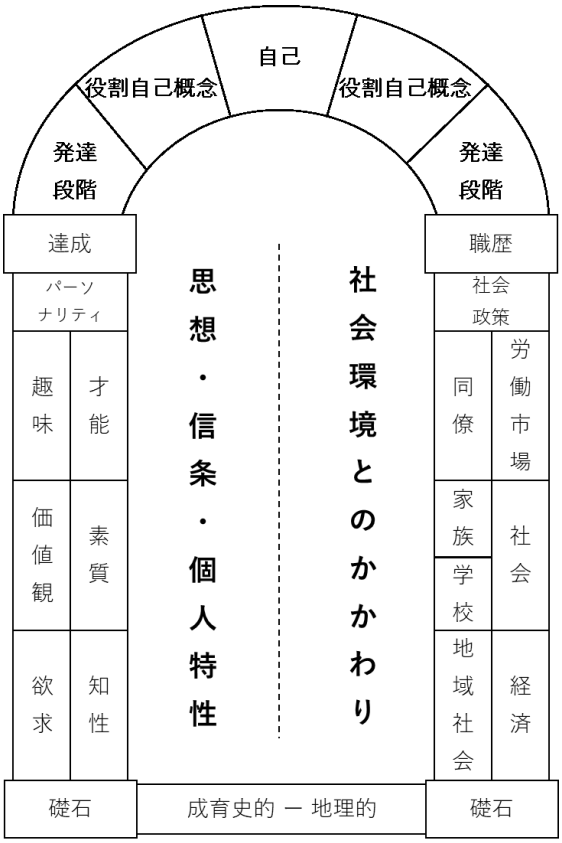

図 1　ライフキャリアのアーチ・モデル（Super(1990)を基に一部修正し，筆者が作成）

いる．さらに，時間的展望の発達について，近年では，時間的展望の発達をどのように促すかについて研究成果が蓄積されつつある．例えば，園田（2011）は，自己の特徴を視覚的に認識しながら過去・現在・未来にわたる自己のライフストーリーを作成する展望地図法を開発し，その手法を用いて青年の未来・現在間における自己連続性やキャリア計画の充実がみられることを示している．

第３節　青年の未来の家庭展望をとらえる研究方法の検討

これまでに行われてきた時間的展望研究の成果を概観すると，未来の家庭展望の実態やその影響要因に焦点をあてた研究はほとんど行われていない現状にあることから，青年期における未来の家庭展望の実態をとらえる研究を行うにあたって，その研究方法を検討する．

まず，青年期における未来の家庭展望の実態をとらえ，その構造を明らかにすることができる指標の開発が求められる．未来の家庭展望を認知的な側面と感情的な側面の二つの視点からとらえる尺度を開発することによって，青年の未来の家庭展望の実態を多面的に明らかにすることができると考えられる．次に，未来の家庭展望の関連要因について，筆者は先行研究において，大学生の親との関係及びこれまでの生活経験が，家族や生活に関する個人の観念や基準である家族観及び生活観を媒介して大学生の未来の家庭展望に影響を及ぼすことを明らかにした（渡辺・今川，2021）．次のステップとして，未来の家庭展望が青年のライフキャリアの形成にどのように作用するかを明らかにしていく必要があり，その研究の意義は大きいと考えている．また，未来の家庭展望を発達させる体系的なライフキャリア教育プログラムを開発し，大学で教養教育として実施されるキャリア関連科目や，家政学に関連する教養科目，または専門科目において開発したプログラムを活用することが有効であると考える．

第４節　研究の目的と論文構成

以上をふまえ，本研究では以下の 3 点を明らかにすることを目的とする．第一に，青年の未来の家庭展望の実態を測定するための尺度を開発するとともに，その信頼性及び妥当性を検討する．また，開発された尺度を用いて，青年がもつ未来の家庭展望の実態及び類型を明らかにする．第二に，青年の未来の家庭展望と関連する要因について，家族観や生活観，及びこれまでの生活環境に焦点を当てて明らかにする．第三に，未来の家庭生活について考える活動をとおした未来の家庭展望の変化について検討したうえで，青年の未来の家庭展望の発達を軸としたライフキャリア教育の可能性について検討する．

第１章　未来の家庭展望の実態と測定方法

第１節　未来の家庭展望尺度の開発にむけた予備的検討（調査１）

本節では，青年期における未来の家庭展望の実態をとらえることができる尺度の開発に向けた予備的検討を行うことを目的とし，大学生 136 名に質問紙調査を実施した．調査項目として，青年が未来の家庭生活について想定できる未来の家庭展望尺度（原案）として 7 因子 34 項目を設定した（「見通しの明確性」，「見通しの連続性」，「指向性」，「将来に向けた準備」，「希望・自信」，「渇望」，「自律」）．

はじめに，尺度（原案）の因子構造を明らかにするために探索的因子分析を実施した結果，解釈可能な 5 因子 25 項目が抽出された．第 1 因子は「見通しの明確性」，第 2 因子は「希望・自信」，第 3 因子は「将来に向けた準備」，第 4 因子は「渇望」，第 5 因子は「指向性」と命名した．次に，尺度の信頼性係数を算出した結果，　5 因子すべてにおいて内的整合性が高いことが示された．次に，確認的因子分析を行った結果，CFI の値は本研究における基準を満たす結果であった一方で，SRMR 及び RMSEA の値は中程度の適合であったが，妥当性があると判断して問題ないと考えた．

第２節　未来の家庭展望尺度の開発（調査２）

本節では，青年期における未来の家庭展望を認知的側面と感情的側面の二つの側面からとらえることができる，未来の家庭展望尺度を開発することを目的とし，大学生 405 名に質問紙調査を実施した．調査項目として，予備調査における因子分析の結果から 5 因子（「見通しの明確性」，「希望・自信」，「将来に向けた準備」，「渇望」，「指向性」）31 項目を，未来の家庭展望尺度の改案として作成した．はじめに，尺度の因子構造を明らかにするために探索的因子分析を実施した結果，解釈可能な 5 因子 29 項目が抽出された．第 1 因子は「見通しの明確性」，第 2 因子は「希望・自信」，第 3 因子は「指向性」，第 4 因子は「渇望」，第 5 因子は「将来に向けた準備」と命名した．次に，探索的因子分析により得られた 5 因子それぞれの内的整合性を検討するために信頼性係数を算出した結果，　5 因子すべてにおいて内的整合性が高いことが示された．また，確認的因子分析を行った結果，モデルの適合度指標は SRMR, CFI，RMSEA のすべての指標が本研究の基準をほぼ満たす結果であった．さらに，未来の家庭展望尺度の各下位尺度と時間的展望体験尺度の各下位尺度間におけるピアソンの相関係数を算出した結果，未来の家庭展望における構成概念妥当性が確認された．

第３節　未来の家庭展望の実態と類型（調査３）

本節では，大学生がもつ未来の家庭展望の学年差及び性差を，未来の家庭展望尺度の合計得点及び各下位尺度得点を手がかりに検証すること．次に，未来の家庭展望を類型化することをとおして，大学生の未来の家庭展望の実態について考察すること．最後に，大学生の思想・信条・個人特性及び社会環境とのかかわりと，未来の家庭展望との関連を探索的に明らかにすることを目的とした．調査の手続き，対象，実施時期は前節のものと同じであった．はじめに，大学生の未来の家庭展望における学年差及び性差について分析を行った結果，学年差も性差も認められなかった．次に，大学生の未来の家庭展望を類型化するために，階層的クラスター分析を行ったところ，「低関心群」，「渇望群」，「楽観群」，「高関心群」と命名可能な四つのクラスターが抽出された．さらに，大学生の思想・信条・個人特性のうち，「計画性」，「自尊心」，「前向きな思考」が未来の家庭展望の複数の因子，とりわけ「見通しの明確性」，「指向性」，「将来に向けた準備」のいわゆる認知的な側面と関連があることが示された．また，社会環境とのかかわりのうち，「親和性」，「感受性」においても未来の家庭展望の複数の側面，とりわけ「見通しの明確性」，「指向性」，「将来に向けた準備」の認知的な側面と関連があることが示された．

第２章　未来の家庭展望への影響要因の検討

第１節　家族観及び生活観と未来の家庭展望との関連（調査４）

本節では，大学生の家族観及び生活観を明らかにしたうえで，大学生の家族観及び生活観が未来の家庭展望に及ぼす影響を明らかにすることを目的とし，大学生 136 名を対象に質問紙調査を行った．前章で作成した未来の家庭展望尺度のほか，家族観及び生活観を尋ねる質問項目をそれぞれ作成した．家族観は「情緒的結合志向」，「共同活動志向」，「規律志向」及び「自立志向」の 4 下位尺度を，生活観は「愛他志向」，「経済安定志向」，「持続可能性志向」，「審美志向」，「理論志向」及び「文化継承志向」の 6 下位尺度を作成し測定した．調査と分析の結果，大学生の家族観及び生活観に性別による違いはみられず，大学生は一般に定位家族から自立したいと考えつつも，これまで家族と築いた情緒的結合を適度に維持したいと考えていることや，経済的に安定した生活を求めており，自然環境や地域の文化に関する課題を含む現代的諸課題にどう配慮するかをあまり重視していないことを明らかにした．また，家族

観及び生活観の下位尺度と未来の家庭展望との関連について考察したところ，未来の家庭展望の認知的側面の獲得及び発達は，多様な家族観及び生活観をもつことによって促されることが示唆された．その一方で，未来の家庭展望の感情的側面の獲得及び発達は，どのような家族観及び生活観をもっているかに大きな影響を受けないことが示された．

第２節　これまでの生活環境と未来の家庭展望との関連（調査５）

本節では，大学生の生活環境，具体的には，定位家族の構成，居住形態，親との関係及び生活経験の実態を明らかにしたうえで，これらの要因と未来の家庭展望との関連を明らかにすることを目的とした．調査の手続き，対象，実施時期は前節のものと同じであった．調査項目について，親との関係について尋ねる項目，これまでの生活経験について尋ねる項目，居住形態や家族構成を尋ねる項目を設けた．はじめに，親との関係について，大学生は父親に比べ，母親とのコミュニケーションが充実しており，心理的距離も近いと感じていることが明らかとなった．また，これまでの生活経験について，大学生はこれまでの生活管理や地域参加におおむね積極的に参加していたと認識していることがわかった．また，大学生の定位家族の構成及び居住形態と未来の家庭展望の各下位尺度との間には関連がみられず，大学生が誰と，どのような場所で暮らしてきたか，すなわち定位家族の構成及び居住形態は，未来の家庭展望に影響を及ぼさないことが示唆された．さらに，親との関係及びこれまでの生活経験のそれぞれの下位尺度を独立変数，未来の家庭展望の各下位尺度を従属変数とした単回帰分析を行った結果，親との関係及びこれまでの生活経験の各下位尺度のうち，複数の下位尺度において，未来の家庭展望の各下位尺度，とりわけ家庭展望の認知的側面に影響を及ぼすことが示された．

第３章　ライフキャリア教育の効果検証―未来の家庭展望の変化に着目して―

第１節　大学におけるライフキャリア教育の効果検証
―未来の家庭展望得点の比較をとおして―（調査６）

本節では，大学生を対象とした全 15 回にわたるライフキャリア教育の授業科目を実践することが未来の家庭展望の肯定的変化を促すかについて，授業科目の実施前後における未来の家庭展望得点の変化に着目して明らかにすることを目的とした．また，大学生が自己の未来について職業生活や家庭生活，市民活動など多角的な視点から検討する学習活動の教育的効果を明らかにすることを目的とした．本研究の対象としたライフキャリアに関連する授業科目は，私立４年制Ｘ大学で開講されている「キャリアデザインⅠ」である．なお，本科目の第 12 回において，大学生が自己の未来について職業生活や家庭生活，余暇など多角的な視点から検討する学習活動（以下，コア活動）を行った．大学生 34 名を対象に「未来の家庭展望尺度」及び「ライフキャリアの能力・態度測定尺度」を用いた質問紙調査を本科目の実施前，コア活動実施前，及び科目実施後の計３回行った．はじめに，本科目実施前後におけるライフキャリアの能力・態度を測定した結果，下位尺度のうち「意思決定スキル」,「他者との関係重視」,「生活経験・ライフバランス」の各得点が科目実施後に有意に上昇していることが明らかとなった．また，科目実施前，コア活動実施前及び科目実施後の３時点における未来の家庭展望を測定し，分散分析及び多重比較を行った結果，未来の家庭展望の下位尺度のうち，「見通しの明確性」,「希望・自信」,「指向性」,「渇望」得点において有意な肯定的変化が認められた．さらに，科目実施前，コア活動実施前及び科目実施後の３時点における未来の家庭展望得点を,「渇望群」,「低関心群」,「高関心群」の三つの類型ごとに測定し分散分析を行った結果，未来の家庭展望の変化について異なる特徴がみられた．

第２節　大学におけるライフキャリア教育の効果検証
―未来の家庭展望に関わる記述分析をとおして―（調査７）

本節では，大学生を対象とした全 15 回のライフキャリア教育の授業を実践することで，未来の家庭展望の肯定的変化が促されるかについて，15 回終了後におけるレポートの記述内容を分析することによって明らかにすることを目的とした．また，大学生が自己の未来について多角的な視点から検討する学習活動の教育的効果を，テキスト分析をとおして明らかにすることを目的とした．対象者，調査時期は前節と同じであり，本科目の第 15 回目終了後に最終レポートの提出を求めた．記述内容について，類似する語同士をグループに分類する階層的クラスター分析を行った結果,「未来の見通し」,「未来への期待感」,「他者とのかかわり」,「長期的視点」と命名可能な四つのクラスターが抽出された．次に，語の出現数を 5，描画する共起関係を 50 までとして，共起ネットワークを作成した結果，複数の語のかたまりからなる四つの群が「大きな島」を形成するとともに，2 もしくは 3 の語からなる「小さな島」が周辺に五つ付置される構図となった.「大きな島」をみると，中心部に「自分」,「将来」,「仕事」などからなる群と,「家庭」,「バランス」からなる群が直接結びついていることが示されていた．また,「仕事」などからなる群と「家庭」などからなる群を間接的につなぐ群として「考える」,「大切」からなる群と,「家族」,「築く」からなる群が左右に付置された．この結果より，本科目の履修をとおして未来の仕事や家庭生活について考える機会を得ることができたことや，今後の家族形成について考えることが未来の仕事と家庭生活を展望するきっかけとなることが示唆された.

終章　総合論議

本研究では，第一に，青年の未来の家庭展望の実態を測定するための尺度を開発するとともに，開発された尺度を用いて，青年がもつ未来の家庭展望の実態を明らかにし，類型化を試みた．第二に，青年の未来の家庭展望と関連する要因について，家族観や生活観，及びこれまでの生活環境に焦点を当てて明らかにした．第三に，未来の家庭生活について考える活動をとおした未来の家庭展望の変化について検討した．本論文より得られた知見及び先行研究の成果から，主に大学における，未来の家庭展望の発達を効果的に促すライフキャリア教育の要点を整理したところ，ライフキャリア教育の実施にあたっては，職業展望との関連を図りながら未来の家庭展望の発達を促すこと，未来の家庭展望の発達を認知的側面と感情的側面の二つの側面からとらえること，未来の家庭展望の類型に即して，最適な教育方法や学習内容を実施することが重要であることが示唆された. また, 本研究の課題と展望について, 第一に, 今後は, 青年期以外の発達段階における家庭展望の発達に着目し，研究を行う必要があることや，発達段階の移行期，例えば青年期から成人前期への移行期や，中年期から老年期への移行期において，未来の家庭展望がどのように変容するのかを明らかにすること，第二に，すでに未来展望を確立した青年が失望を伴うような予測できない出来事に直面した際に，その状況にどう向き合うのか，また，これまでの目標や理想としたライフプランをどう修正するのかを，家庭展望に着目して明らかにすることが必要であることが示唆された.

参考文献

Arthur, N.（2014）．Social justice and career guidance in the Age of Talent. International Journal for Educational and Vocational Guidance. Vol. 14, 47-60.

Gratton, L. and Scott, A.（2016）．The 100-Year Life: Living and Working in an Age of Longevity. Bloomsbury Information Ltd.（池村千秋（2016）．ライフシフト 100 年時代の人生戦略．東洋経済新報社.）

石井僚（2015）．時間的連続性尺度の作成．青年心理学研究．Vol.27, 39-47.

河﨑智恵（2011）．ライフキャリア教育における能力領域の構造化とカリキュラムモデルの作成．キャリア教育研究．Vol.29，No.2，57-69.

小西琴絵（2019）．主体的キャリアと時間展望概念の関係性の検討．東海学園大学紀要．No.24, 1-14.

Kooij, D. T. A. M., Kanfer, R., Betts, M., & Rudolph, C. W.（2018）．Future time perspective: A systematic review and meta-analysis, *Journal of Applied Psychology*, Vol. 103, No.8, 867-93.

Lewin, K.（1951）．Field theory in social conflict: selected papers on group dynamics．New York: Harper.（猪股佐登留（1974）．社会科学における場の理論［増補版］．誠信書房.）

Miller-Tiedeman & Tiedeman（1990）．Career decisionmaking: An individualistic perspective. In D. Brown, L. Brooks & Associates (Eds.), *Career Choice and Development*. (2nd ed., pp. 308-337). San Francisco, CA: Jossey-Bass.

園田直子（2011）．時間的展望を形成する方法としての「展望地図法」の開発とその効果の検討．久留米大学心理学研究，No.10，22-30.

Super, D. E.（1990）．A Life-Span, Life-Space Approach to Career Development. In Brown, D. and associates (Eds.) Career Choice and Development. San Fransisco: Jossey Bass.（渡辺美枝子編著（2018）．新版キャリアの心理学［第 2 版］―キャリア支援への発達的アプローチ．ナカニシヤ出版.）

和田万紀（2019）．時間的展望と精神的健康：過去，現在，未来から立ち現れる「現在の拡がり」．桜文論叢 No.100, 1-22.

渡辺朗生，今川真治（2021）．親との関係及びこれまでの生活経験が大学生の未来の家庭展望に及ぼす影響―家族観，生活観を媒介して―．日本家政学会誌．Vol.72, No.12, 776-788.